

研究会の記録

山本 光正

研究目的

道と川は都市における重要な交流空間で、都市における道は、それに連なる辻・路地・小路・裏路それぞれに一つの空間を構成し、特有の人間交流がおこなわれる。川もまた水の流れそのものとともに土手や橋上、さらに橋下がそれぞれに独自の交流機能をもつ。こうした道と川の諸機能と人々の営みを多角的に、また構造的に捉えて、そこから日本の都市の生活空間の歴史特質の一端を明らかにできると考える。このため特に以下の検討を中心として行っていく。

- (一) 都市空間を構成する道と川の実体把握と類型化
- (二) 道と川の機能的結合の検討
- (三) ハレとケの生活と道と川のかかわりあい
- (四) 都市生活における陰の部分と道と川のかかわりあい
- (五) 都市計画及び道と川の支配形態の検討

研究組織

(所属は共同研究実施期間当初のもの)

研究代表者	岩井 宏實	(国立歴史民俗博物館民俗研究部)
共同研究員	松平 誠	(立教大学社会学部)
	千田 稔	(奈良女子大学文学部)
	野沢 謙治	(本館客員教官・郡山女子大学短期大学部)
	岩本 由輝	(本館客員教官・東北学院大学経済学部)
	野本 寛一	(近畿大学民俗学研究所)
	森栗 茂一	(本館客員教官・大阪外国語大学外国語学部)
	吉原健一郎	(成城大学文芸学部)
	加藤 貴	(東京都北区文化財専門調査員)
	野堀 正雄	(小谷城郷土館)
	波多野 純	(日本工業大学工学部)
	内田 龍哉	(千葉県立中央博物館学芸部)
	岡田 茂弘	(国立歴史民俗博物館考古研究部)
	朝岡 康二	(国立歴史民俗博物館民俗研究部)
	山本 光正	(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

研究実施状況

平成二年度

平成二年七月二〇日 於国立歴史民俗博物館

研究会運営に関する討議

研究発表 山本光正「諸国人の見た京都」

平成二年九月八日 現地調査

東京都北区王子稻荷・飛鳥山及び中央区日本橋周辺調査見学

平成二年二月一七日 於国立歴史民俗博物館

午前中成田街道・城下町商業地・武家屋敷の調査見学

研究発表 野本 寛一 「大井川の流通性と遮断性」

内田龍哉 「栖原屋角兵衛について」

平成三年一月二日―三日 現地調査

大阪市街ミナミ周辺・黒門市場及び奈良市街町会所の調査見学

平成三年度

平成三年九月六日 於国立歴史民俗博物館

研究発表 岩本由輝 「北陸浄土宗移民の経路に関する一考察」

岡田茂弘 「御成街道と千葉御茶屋御殿の成立」

平成三年一月八日 現地調査

千葉県立中央博物館及び旧千葉市街調査見学

平成三年一月九日 於国立歴史民俗博物館

研究発表 波多野純 「上水と職人」

岩井宏實 「大和川をめぐる文化」

加藤 貴 「江戸の名所王子」

平成四年一月一〇日―一二日 現地調査

山形県鶴岡市街及び致道博物館調査

山形県酒田市の街の変遷及び最上川河口付近施設とその機能に関する調査

平成四年度

平成四年四月二日―一四日 現地調査

香川県金比羅の門前町・信徒寄進石造物・同社所蔵資料の調査見学

平成四年一〇月一〇日―一日 現地調査

静岡県島田市内宿駅景観・街路及び情報交流の場としての島田宿の調査検討、市立博物館・焼津漁港の調査見学

調査検討、市立博物館・焼津漁港の調査見学

平成五年三月一二日 於国立歴史民俗博物館

研究発表 朝岡 康二 「沖繩におけるマチについて」

吉岡健一郎 「江戸の道空間について」

野堀正雄 「職人絵巻について」

松平 誠 「道川海をめぐる交流空間の変容と天王祭」

研究成果の概要と反省

本共同研究は、本館における研究発表会と各地でのフィールドワークとから成り立っている。研究発表会は、各研究者がすでに取り組んできたテーマを元にして、「道と川」との関係から改めて読み直す作業を行っ

てきた。

たとえば、岩井は大和川水運の積み替え地点となった亀ノ瀬を対象として、河川交通の障害がかえって交易拠点を生み出していったことを明らかにしつつ、大和盆地と大阪との交易の意義を述べ、さらに大和川掛け換えが及ぼした広範囲な影響を示した。野本は島田の町を採り上げて、大井川と島田宿との関係を分析することから、川の持つ諸性質（遮断・接続その他）がいかに地域形成に反映するかを示して、川の持つ地域性形成に対する多様な影響を分析的に示した。一方、加藤は王子稲荷とその参拝道がどのように江戸の遊樂に結びついて今日に及んだかを示し、吉原は江戸の道が町共同体とどのように関わっていたかを、行き倒れ、捨て子の処理をめぐって、また、橋の改修などの負担のありかたから示し、そこに見られる武家屋敷の取扱いから、近世都市の解釈に新しい視点を提出した。松平は、祭の変容を通して宿場・漁師町・河口であった品川が近世・明治時代以後のいわゆる近代化を通して、どのように道・川・海との関係を変えて行ったかを示して、それには町の性質の変容を伴っていたことを明らかにした。波多野は都市のインフラストラクチャーとしての上下水道に着目して近世城下町の空間的特徴を抽出し、山本は歙形惠齋の江戸図の分析から上京人の目から見た江戸の姿を推測した。また、野堀は「天保四年物売集」を用いて道を商い歩く人々の多様な姿を示して、道が持つ商業空間としての役割を強調した。朝岡は那覇の都市形成とそれ以後のマチの成立について、その商業慣行との関わりから分析し、石垣四箇の都市化に際して寄留民の果たした役割の大き

かったことを明らかにした。

研究発表に平行して行われた現地研究は、個別の発表に関連する地域を実見して理解を深めるとともに、性格の異なった都市を比較するため東京・大阪・奈良・鶴岡・酒田・島田・焼津・丸亀などでの現地研究をおこなった。

以上のような研究をふまえて行われた最終会においては、いわゆる「都市」・「近世都市」の規定をめぐって問題提起がなされ、都市・都会・町・村の区分ないしは規定について意見の交換がおこなわれた。一般に言われている「都市」的事象は実は「町」の事象として把握する方がよいという意見、近代化ないしは現代化を都市化と捕らえる社会学の方法などが披露され、今後の都市研究にとって、都会と都市、都市と町などの区別が問題となるという指摘があった。これらの概念規定はそのまま道・川の意義に関わり、交流空間の問題につながるのである。したがって、今後の都市研究は、都市を規定するインフラのあり方とそこでの人間存在がどのような特徴を持つのかを考察したその上で、都市・都会・町・村の意味付けを検討していく必要がある。